

チーフテスターの アルバム 17

笹目二郎

今月はランボルギーニの話です。サンタガータのランボルギーニ社を訪ねたのは、1985年頃だったと思います。マフラーで有名なANSA社へ行った時に、まだ工場を見たことがないのならば……と言って、広報のお姉様がちょっと寄って見せてもらいましょう、と連れていってくれたのです。ランボルギーニもANSAマフラーを純正採用してましたから、広報同士も顔なじみだったのでしょう。ま、イタリア人は気が合えば、すぐお友達になってしまいますが。

当時の責任者だったアルフィエーリは不在で、広報氏はボクの名刺をくれと言って、代わりにアルフィエーリの名刺を1枚くれました。会ってなくとも有名人の名刺は持っている損はないでしょう、というわけです。後になって、名刺ホルダーから2mmほど出た横長の名刺を、その分切って後悔したのも今では良き思い出です。

ANSAマフラーを日本に輸入していた阿部商会は当時、ランボルギーニの輸入代理店でもありました。LM-002という、カウンタック用のV12を積んだ超高性能4WD (SUVのスーパーカー) を少数導入してました。カウンタックやミウラはもちろんランボルギーニの代表作ではありますが、ボクにとってはこのLM-002が一番強烈な印象を残してくれたランボルギーニです。現代ではポルシェ・カイエン/VWトゥアレグだのBMW X5だの、高性能大型SUVがそこそこの値段で量産されていますが、当時のLM-002はまったく手作りの高価格少量生産車でした。あの時代からフェルッチオ・ランボルギーニ氏は、お金持ちの心を理解していたんですね。

LM-002はJARI(ヤタベ)に持ち込まれました。砂利道のコースも走りましたが、そこを舗装路のように走る感覚は正に異次元の世界で、その後の高速周回路では目からウロコが何枚もポロポロ落ちて止まらないくらい感動しました。誰かが車の前にいて分厚いじゅうたんを敷いてくれているような、真にタイヤのエンベロープ特性の極致という乗り心地感覚は、いまだに同類の感触を思い出させてくれる例がないほどです。ピレリのスコルピオというSUV専用タイヤのなせる技だったのかもしれませんが。

カウンタックもそうですが、ランボルギーニのダイレクトなギアシフトはオイルが温まってくるほどにスムーズさを増し、ギアの精度やシフトの感触は、例えばミッドシップ同士で比較するならばリモコンシフトのフェラーリを凌ぐものでした。ロッドを介した間接的なものではなく、ギアとギアが噛み合う歯当たりの感触は直接手の平に伝わり、グッと押し込むのではなく、方向性を与えて力を加えるだけで吸い込まれるように噛み合ってくれ、その歯車の慣性に同調させて回転を合わせる時のエンジンのレスポンスたるや……。なんでもATまかせで、“乗せられているクルマ”に馴染んでしまった人に、うまく説明することは出来そうにありません。

笹目二郎

自動車メーカーでテストドライバーとして車両開発に携わった後、カーグラフィック編集部に加わる。チーフテスターとして数々のスーパースポーツのフルテストを担当。現在はフリーランスのモータージャーナリストとして活躍中である。



photo : CG library